

さりとて、法を壞る者を置いて、~~詰責せし~~、駆遣せないといつではあります。

~~法を護る者と、法を壞る者とは、到底、共住ことはできませぬ。~~

~~法を護る者が、長短を措いて、お互に親交和合することです。~~

~~大衆多きに従つて、和合の方便を誤まる傾もあります。~~

~~他を咎むるより前に、自らを責めねばなりませぬ。~~

~~人に長短無きにしもあらず、只肝要の心掛けは、其の人の長短を説かないこと~~あります。

「不説他人 好惡長短」の誠は是であります。

(落慶四十五周年記念『花岡山』平成十一年四月刊行 二二頁)

\* 五逆罪=父を殺すこと。母を殺すこと。阿羅漢(出家行者)を殺すこと。仏身より血を出すこと。僧团を破壊する破和合僧のこと。以上五つの大罪。

\* 長短=長所と短所。

- 10 -

### 日本山妙法寺藤井日達山主法語

#### 不殺生戒

昭和三十六(一九六一)年二月二十六日午前七時二十分

日本テレビ『宗教の時間』放送

- 11 -

#### 南無妙法蓮華經

日蓮大聖人の御消息に曰く

「有情の第一の財は命に過ぎず。

此を奪ふ者は必ず二途に墮つ。

然れば輪王は、十善戒の始めには不殺生。

仏の小乗經の始めには五戒、其の始めには不殺生。

大乗密綱經の十重禁の始めには不殺生。

法華經の寿量品は、釈迦如來の不殺生戒の功德に當つて候品ぞかし。

されば、殺生をなす者は、二世の諸仏にも捨てられ、六欲天も、是を守る事無し。  
 (法華經要文抄「主君耳入此法門免乎同罪事」一二六頁)

現代、地上に生きとし活ける人々は、老若男女を問はず、齊しく、極度の不安と恐怖と苦惱とに閉ざされております。

それは、我等が最も大切とする身体、生命が、早かれ、晚かれ、一瞬にして、灰となり、煙とならんとする危険を、ひしひしと感するからであります。

現代文明の基盤に打ち立てられたる近代国家、その經營する政治、経済、外交、軍備、学問、技芸等々は、すべて人間全滅の罪悪、すなわち殺生業道に奉仕し、隸属せんがために、進歩、発達を怠らない状態であります。

宇宙時代が來たと言つても、人間の危険は、それに比例して、倍増するばかりにして、人間の危険を排除するには、一向に役に立ちませぬ。

世界の指導者たちが、口を開けば、平和を唱えながら、その手には、恐るべき殺人用の爆弾を握り止めております。

-12-

福なるかな、現代文明、そは呪わるべき大魔王の正態であります。

凡そ生命ある者は、その生命を守らんがために、種々の手段を採用します。

これを或は正当防衛、或は自衛と称しております。

而して、かの恐るべき、人類絶滅を予想される原水爆戦争さえも、また自衛の名を盗んで、天下の眼を掩わんとしております。

日本国の自衛隊の設置の如きも、正にそれであります。

自衛隊の職業が、殺人破壊であり、不生産、不道徳、反宗教なるのみならず、第一に自衛隊の名称から、既に不道徳であります。

そもそも自衛とは、自己の生命を、その危険、迫害に対して守らんとする意味であります。

もし、その危険といつもの、自然現象から来る天変地天とか、或は猛獸毒蛇の襲来とか、疫病の流行とかであるならば、それに対して、いかなる手段を採用しても、必ずしも不道徳でもなく、反宗教でもあります。

-13-

しかしながら、その危険というものが、人間の社会生活、乃至は国際的に存在するものであるとするならば、それは、直ちに隣人、隣国に対して、自己の生命に危険を加うる者とすることになりますので、人と人との間、国と国との間に、不信は募り、猜疑は増し、恐怖心を催して、必ず平和なる社会生活、円満なる国際交渉を営まんとする、道徳的感情が破壊されてしまいます。

次に自衛の手段として、日夜に大量に無慈悲に殺人破壊の方法、即ち、現代戦の準備、訓練をするにおいては、正に不道徳の本性顯然であります。人間発達の長い歴史の過程において、誤って殺人破壊の戦争手段を採用して、自衛を講ぜし時代もあるにはありました。

もし、人類が、この過失を長く固執しておつたならば、人類は、今日の原爆戦争を待たずして、遠くの昔、金属文明の時代か、乃至は火薬発明の時代において、既に全滅してしまったでしょう。

しかるに、今日まで、人間がともかくも、地上に生存し、繁栄しておるという事実は、人間が、自衛のために、戦争殺人とは、全然反対の方法、いわゆる不殺生戒を採用し、

尊重したるが故であります。

試みに日本歴史を繙く時、かの源平二氏が、専ら戦争手段を用いて、自衛策といたしました。

かくて源平二氏は、相互に殺し合いを始めてから、僅かに四、五十年間にして、双方ともに全滅に陥りました。

かの源平二氏の末孫が、今日なお存在することを得たる所以は、彼等が、つくづくと戦争の本質が罪悪であり、無意義であることを体験して、戦争なき山間、窮谷に隠れ忍び、素直に武器を捨てて、槍を鎌とし、剣を鋤として、絶対平和の生活に転じ、我が愛情と非暴力をもつて、仇敵の心に、愛情と非暴力を喚び起こさせるが故であります。

かの日向の国、肥後の国の山間に残る民謡の稗搗節の文句は、正に平氏の残党が、源氏の追討軍の前によく生存することを得たる、唯一の自衛手段を証明するものであります。

最近、市中街頭において、少年に刃物を持たせない運動が展開されております。

最近、少年の手によって、殺人、傷害、暴行等の凶悪殘忍なる犯罪が、日々に増加し、

夜々に悪質化して、警察の補導などの対策の効果が無いところから、社会全体総掛りで、先ず犯罪の道具たる刃物を、少年の手に持たせないようにして、少年の凶悪犯罪を未然に防止せんとするものであります。

ある少年は、社会の悪を淨めんがために、敢て刃物を持つこともあります。しかし、その動機はいかにもあれ、一旦、刃物を持つことを諦めたならば、他の少年たちも、正義のためといって皆、刃物を持つことになり、少年の犯罪は増加する傾向を辿りましょう。

そこで、少年に刃物を持たせない運動は当然、前進して、「たゞ正義のためであつても、自衛のためにあつても、決して刃物を使用してはいけない」というように呼びかけることになりました。

今日の世界に張る人類の恐怖も、その根本は、先進国、強大国と称せらるる国々が、軍備競争に夢中になつて騒ぐからであります。

欧米の強大国が最初に誤って、優勝劣敗、弱肉強食という動物の罪惡的法則を、平然と

- 16 -

して、人間の社会に応用し、近代国家の大方針として採用したるが故であります。

日本國の自衛隊設置も結局、弱肉強食の軍備競争に一枚加わるだけにして、したがつて、世界人類の危険に拍車をかける結果とはなつても、決して、日本國の安全を保証することもできず、國家の危難を防衛することもできませぬ。

少年の犯罪防止のために、少年の手に一切の刃物を持たせない運動、さらに、たゞ正義のためにでも、たゞ自衛のためにでも、一切、刃物を持たせないという運動は、そのまま大人の社会、延いては國際社会に移して、諸國家の軍備全廃、自衛戦争拠棄といふ道徳的發展を遂ぐるならば、人類全滅の罪惡を防止することができて、人類は皆、安樂の生活を悦ぶことができましよう。

- 17 -

四海波静かななる現在において、思ひがけなく、俄に、日本國に国家的危難が襲い来ないとは、誰も断言せないでしよう。

その時、どうすればよいでしょうか。

自衛隊は、そんな場合を想定して設置されるものであります。

通常、自衛隊があれば、国家的危険は必定して、防衛することができるものであり、自衛のための戦争行為は、断じて勝利に帰するものであるかのごとく、迂闊にも、迷い込むが故に、國家の安泰は一にも自衛隊一にも自衛隊となつて、遂に武力万能の白星夢むに耽るのです。

軍備論者としては、自衛隊を設置しても、戦争行動を起こすところまでは、自己の職業として考えるけれども、その自衛戦争の結果が、敗北に終る悲劇などを考える人は、一人もありませぬ。

まことに短見浅慮の至りであります。

武力を恃む安全感は、古代から軍人一般に伝承せられし、深き迷信に過ぎませぬ。

中国の兵書の、いわゆる「備えあれば憂いなし」という言葉を信じております。今日の常識としては、むしろ、その反対で、軍備に由る不安が心配されるのであります。我々は、かの伊勢の神風を呼ぶ、無敵皇軍の忠勇なる聖戦の結果が、いかに日本国がみじめに、いかに日本民族が悲しい目にあつたかを、未だ忘れ去ることはできませぬ。加之、現代新兵器の性能は、人間に一切の戦争行為を禁制すべき、時機到来を警告す

— 18 —

る天の声であります。

この天の警告を無視して、なまじいに軍備を設けて、自衛戦を行えば、そこには、国土を焼き尽くす炎が燃え、民族を全滅に陥れる淵が開くるのみであります。

万国に對けて、軍備全廃、戦争拠棄の憲法を制定せし、日本民族は、二十億萬の人類全滅、五大洲の国土總破壊の危険、すなわち如來の未来記にある末法悪世、闘諍堅固の今日を、救わんがために遣わされたる、如來の使者としての自覚を發し、世尊の制定し給いし、不殺生戒に徹底せねばなりませぬ。

また、他方、自衛隊なき眞実の非武装、不戦の日本国に、もし、俄に国家的危難が起つた時には、どうすればよいでしょうか。

その時に、日本国の指導者は、侵入者の恐るべき武器の前に並び立つて、合掌禮拝して、平和交渉に取りかかりましょう。

国民の男女は、その後に続きましょう。

しかば、いずれの国の軍隊が、いかに憎恶心、敵愾心を燃やしても、これに対して妄

— 19 —

りに発砲し、爆撃することはありません。

人間の精神は、そんな粗暴なことができないようになります。

如来の不殺生戒は、ここに信受せらるる基礎があります。

しかれども、もし侵入者が、合掌礼拝して、平和を求めて並び立てる、日本國の指導者

および国民男女に対して、慈悲にも銃砲爆撃を加えるかもしれません。

その時は、從容として、枕を並べて死地に就きましょう。

これこそ、世界恒久平和建設の神聖なる犠牲であります。

世界人類の危険、苦惱を救う菩薩の菩薩行であります。

前大戦において、皇軍は自衛戦争を行い、民衆は疎開し、或は防空壕に隠れましたけれども、死せし者は大約八百万人にも上りました。

他国の人を殺せることは、さらに、これよりも多かつたでしょう。

合掌して並び立つても、その死者は、その千分の一、万分の一にも及びますまい。

まして他国的人は、一人も殺しませぬ。

いかに死を恐れても、戦争をすれば、現代においては必ず皆、死なねばなりません。

死を恐れるならば、絶対に戦争をしないことが肝要であります。

戦争を抛棄せんがためには、その方便たる軍備を全廃すべきであります。

日蓮大聖人の立正安國論に曰く

「汝須らく一身の安堵を思はば、先づ四表の靜謐を禱るべきものか。」

我々は視野を狭くして、但だ我一身の危険とか、一国の危険をのみ考うる時には、自衛隊も、或は必要になるかの如き錯覚をも起こします。

しかしながら、現在の人類の問題としては、世界万国の人類全滅の危険が迫つております。

我等は視野を広げて、人類全滅の危険を救わんがためには、日本國の軍備と戦争、世界各国の軍備と戦争とが、人類全体の敵となることを認めてから、先ず、これを排除せねばなりません。

我等が先ず第一に「四表の靜謐」、すなわち人類全体の救済を祈るならば、その祈りの中に、我が一身の安全も、我が日本国の安全も、自然に到来するであろうという教訓であります。

日本国、乃至、世界万国三十億万の人々が、現代文明の悲劇の下に、もし安穏の活路を求めるべしと欲するならば、我が釈迦牟尼世尊の制定し給いし、不殺生戒を信受護持するよりほかには、何の方法もありませぬ。

### 南無妙法蓮華經

(藤井日達山主御書『一闇浮提』一四八〇一五四夏)

- 22 -

日本山妙法寺藤井日達山主 米国法話集

### 宗教文明への転換

— アメリカは人を殺した罪を懺悔せねばならない —

昭和五十三(一九七八)年五月二十六日  
米国ニューヨーク 国連本部前チャーチセンター

- 23 -

### 南無妙法蓮華經

この戦争を止めるのも、軍隊を作るのも、核兵器をつくるのも、根本は、人のお金をもうけるのに、どうすればよいかといふ、そういう貪欲といいます。

この欲が心に燃いて、今日、人類に不幸をもたらしております。

日本国も、ここ百年近く以前から、西洋の文明を受け込みまして、軍隊を作ります。

そして、軍隊が戦争をします。

戦争することによって、数々利益をあげます。

帝国主義というものが、ここにできあがりました。